

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

No.54

平成18年度 冬

告知 平成19年度全国大会

論説 西桂「兵庫県の庭園文化の地域特色」

発行 日本庭園学会(会長 中島 宏)
〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-1
(有)造園会館気付
TEL(03)-3462-2850 FAX 03-3464-8465
<http://www.soc.nacsis.ac.jp/asjg/>

京都市指定名勝 知恩院方丈庭園



現状石組護岸の下部から江戸期の洲浜を検出

知恩院方丈庭園(京都市東山区)では、平成17～18年度にかけて実施された、整備工事に伴う埋蔵文化財の確認調査で洲浜状の遺構を検出し、園池が4期にわたって造り替えられていたことが明らかとなった。

庭園は、浄土宗総本山知恩院境内の方丈南西側に位置し、かぎ型の敷地形状をもつ。園池は中央の石橋で方丈に東面する北池と方丈に南面する南池に二分されている。確認調査は北池を対象に行われた。

平成17年度の調査では、西岸から中央部にかけて設けられたトレンチで洲浜状遺構が確認され、江戸前期か

ら中期の遺物が出土した。洲浜の汀では1.5～2.0mの幅で10～20cm程度の石張りがシルト層に張り付いたような状態で検出した。平成18年度の調査では、上記洲浜状遺構から方丈に向けてトレンチを設けたところ、洲浜の延長部分を確認し、今日も地上に露出している景石のひとつは洲浜の成立面に据え付けられていた。

現在の護岸は、確認調査で検出した洲浜の上部に築かれた状態にあり、園池護岸の意匠は当初の洲浜から石組・石積へと造り替えられていることが確認された。

<第3面に関連記事>

(今江秀史)

予告 日本庭園学会全国大会・シンポジウム

平成 19 年 6 月 16・17 日 東京都内

大会実行委員会（委員長 鈴木誠）と研究会・シンポジウム実行委員会（委員長 小野健吉）は、平成 19 年度全国大会の開催スケジュール及びシンポジウムのテーマを決定した。

開催日程は、平成 19 年 6 月 16 日（土）と 17 日（日）

の 2 日間である。16 日には研究発表大会及び総会、懇親会が行われ、17 日にはシンポジウムが行われる。会場は東京都内。シンポジウムでは、テーマに相応しい著名なゲスト 2 名の招聘が予定されている。大会の詳細については次号の本紙にて発表する。

研究発表会 原稿の募集

研究会・シンポジウム実行委員会では、来る 6 月 16 日（土）に行われる研究発表会の参加者を募集している。発表を希望する方は、A 4 版用紙に発表者の氏名、題名、概要（200 字程度）、発表時に使用を希望する機器類、連絡先を明記のうえ、4 月 26 日（木）までに大会実行委員会事務局へ送付し発表の登録をすること。研究発表の概要は次号の本紙（No.55）に掲載する予定。

続いて発表者は、6 月 7 日（木）までに研究発表資料を大会実行委員会事務局へ送付されたい。研究発表資料の分量は、2 ページ、4 ページもしくは 6 ページで、1 ページあたりの文字数は、図・表・写真を含めて 2,000 字となっている。研究発表資料集は、提出原稿をそのまま版下として印刷することから、できる限りワードプロセッサを使用して作成して頂きたい。研究発表資料は、全発表者分をまとめて資料集とし発表会で配布する。

ページレイアウトは、学会誌の論文等に準じ、横書き 2 段組、1 段あたり 25 字 40 行となっている。なお、書式はホームページからダウンロードが可能。

発表時間は 20 分、質疑 5 分を予定し、スライド・パワーポイントの使用が可能となっている。

なお、申し込みと資料の締め切りは厳守のこと。

▼申込先

〒156-8502 東京都世田谷区桜ヶ丘 1-1-1

日本庭園学会 大会実行委員会事務局

東京農業大学 造園科学科 鈴木誠 宛

TEL 03-5477-2430 FAX 03-5477-2625

E-mail:makoto@nodai.ac.jp



平成 18 年度研究発表会で発表を行う河原氏・宮内氏

運営ボランティアの募集

平成 19 年度全国大会の実施にあたって、運営ボランティアを募集する。

主な作業内容は、会場の設営及び運営の補助、シンポジウムの発表内容の文書化（テープ起こし）及び編集、

研究発表会・シンポジウム開催風景の撮影とレポートの作成等となっている。これら編集、執筆の成果は学会誌及び本紙に掲載する予定。

学会の運営や取材・執筆・編集作業に興味がある方は、氏名、所属、連絡先、特に携わりたい作業内容を明記の上、6 月 7 日（木）までに上記申込先までお申込み頂きたい。詳細については各委員会の担当から個別に連絡する。

庭園の歴史 庭園の現代 今、日本庭園学会に求められるもの

シンポジウムのテーマが決定

今、日本の庭園が世界から、ひろく一般から注目を集めつつある。

また近年、庭園の歴史に関する研究の進捗は著しく、発掘成果や研究成果、そして復元整備成果の蓄積も進んでいる。

日本庭園学会は10年を超える活動実績をもつ、日本における唯一の「庭園」を対象とした学術団体である。この日本庭園学会が、現代社会の要請に応えるべくこれまでの研究活動成果を元に、今何を課題とし、今後何をすべきかを問い、参加者と共に考える。

以上のような問題意識をもち、日本の庭園をめぐる過去・現在・未来を視野にいれつつ、庭園にかかわり様々にご活躍中のお二人の先生方をお招きしてシンポジウムを企画した。

この会には、学会員はもとより、広く学生や庭園に興味をもつ一般市民をも対象とし、今、そして今後、日本

洲浜の遺構は、これまでに平城京及び平城宮の庭園跡において検出されていることから、奈良時代の初期には成立していたと推察される護岸形態である。

さらに平安京跡においても洲浜は数多く検出されており、築造の年代は平安期から鎌倉期までの事例が数多く確認されている。

『岩波日本庭園辞典』所載の項目「洲浜」にもあるように、一般的には室町時代に入ると護岸形態は石組・石積に移行し、洲浜は廃れていくと考えられている。それは、現存する室町期の庭園をみれば後世の造り替えを考慮しても妥当な解釈であるとみられてきた。

しかし、今回の調査を含め、近年室町末期から江戸初期にかけての洲浜状護岸の検出が相次いでいる。知恩院方丈庭園の洲浜の場合は、それほど時間を置かず改修を受けて石組に造り替えられている。その動機はさることながら、短期間に意匠が劇的に変化した事例は、庭園と改変との密接な関係の歴史を知る上で実に興味深い。

庭園学会が取り組むべきことは何か、発信すべき情報は何かなど、そのフレームを明確にしていく。

鈴木誠（大会実行委員会委員長）



平成18年度公開シンポジウムの開催風景

また、庭園の護岸意匠が洲浜から石組・石積へと移行する過程は緩やかなものであり、短くても室町期から江戸前期までの推移期間があったと想定される。

近年の文化財庭園の修理工事に伴う埋蔵文化財の確認調査でも、護岸形態の遷移には複雑な過程があることを伺わせる事例がある。

醍醐寺三宝院庭園の護岸は、人頭大の石積の上に釣り合いのとれない大きな石が上部に載っているという、一見不安定な外観を呈しているが、上部の石は堅牢な地盤の上に据えられており、石積にみえる部分は護岸を覆い上部の石を頬杖として支える貼石としての役割をもつ。また、西本願寺滴翠園の築造時のものと推察される護岸石は、石相互の組み合わせというより、地盤に据えられることで安定していることが確認されている。

庭園遺構の検出事例の増加によって、庭園の整備や修理に伴い護岸の形態や構造を検討する上では、先入観を排し確認調査の結果を考慮する必要性が生じている。

洲浜の変遷史に一石を投じる

知恩院方丈庭園 埋蔵文化財確認調査

理事会の開催

平成 19 年 4 月 21 日 (土) 於 TFT ビル

総務委員会 (委員長 佐々木邦博) は、4 月 21 日 (土) に東京ファッションタウン (TFT) ビル東館 9 階研修室において、理事会を開催することを決定した。時間は、13:30 から 17:30 までを予定している。

議題は、平成 18 年度会務および活動報告案、平成 18 年度会計収支決算報告案をはじめに、学会費バックナンバーの頒布価格の見直し、学会賞選考結果および総

会での授賞について、平成 19 年度活動案および予算案、関西支部および関西支部担当役員の位置づけの明確化についてなどを予定している。

理事各位は、4 月 2 日 (月) までに葉書で総務委員会 (担当理事 三島孔明) へ出席の返答をすること。都合により出席できない場合は委任状を提出されたい。また、各担当委員会は平成 18 年度活動報告案と平成 19 年活動計画および予算案の原稿作成を検討するとともに、会計決算処理を行い、同じく 4 月 2 日 (月) までに原稿を総務委員会へ送付すること。

現地見学会に参加して

「皇居」平成 18 年 11 月 9 日 (木)

近いがゆえ、長く東京に住みながら私はこれまで皇居内の御苑を訪れたことがなかった。かねてより行ってみたかった場所に行くことができとても嬉しかった。

なかでも今回の参観で特に印象に残ったことが 3 つあった。

一つは御所とそれを取り巻く濠である。私は、皇居が日本を代表するランドスケープであることを再認識し、自分が日本人でよかったと改めて感じた。日本では、明治期、欧米の様々な手法や技術を取り入れ、自国のものとしてきた。そして、西洋に対し憧れをもち続けてきた。西洋に対する憧れが強いためか、本来持っている日本独自の文化の素晴らしさに対し、もっと自信を持つべきではないかと思う。皇居は諸外国に負けない美しい空間である。東京の中心にいながら、静けさや優雅さを感じ、時間の流れがそこだけ違うような錯覚を覚えた。贅沢でありながら、それを誇示することなく、洗練された美しさも随所に感じられた。景観や自然、環境に対する意識



が高まっている今こそ、古くからある素晴らしいものを体感し、その上で日本にふさわしいランドスケープができるのではないかと感じた。

もう一つは富士見多門の高い石垣と冬枯れのハスであ

る。日本ではじめてみた感動的な風景だった。

それが都会の真中であることがまた驚きである。自然の中にある直線のライン (濠と櫓)、白い壁、歴史を経たどっしりとした石垣、そして荒野のように見える金色のハス、そのまわりを取り囲む樹木、そして、背後には高層ビルなどが見えることもなく、斜がかかった空 (排気ガスだと思う) が広がる。海外で広々とした風景をみることもあるが、それよりも洗練された無駄のない独特な風景であった。私の心の中にこの風景はこれからもずっと残り続ける。本当に貴重な体験だった。

そして、案内をしていただいた澤田先生には決まりきった内容ではなく、哲学的な視点のアドバイスをいただき、ありがとうございました。

学問的な勉強も必要ですが、哲学的な広い視野で庭を觀賞することは、本質をみることには大事なことだと感じました。これからもその視点を忘れずにいきたいと思いました。

寄稿：中村 文 (東京農業大学 学生)

現地見学会に参加して

「関西大会」 平成 18 年 12 月 9 日（土）

日本庭園学会関西支部大会の見学会に初めて参加させていただきました。私個人は、近世日本の宮廷庭園文化を研究していることから、今回の見学会のテーマが「宮廷の庭」であると聞き、すぐさま申し込みをしました。

当日は生憎の雨となり、やや暗い気持ちで見学会が始まりました。しかし、一旦お庭が目に入ると先ほどの気持ちは一掃されました。雨にぬれた石は生き生きとしており、木々はそれを包む空気の透明度が低いために、より鮮やかに浮かび上がっていました。特に未だ僅かに残る紅葉の色彩と周囲の雨霧とが相まって、幻想的な雰囲気醸し出していました。晴の日ばかりに庭園を見に行っていた私は、改めて庭園をみるには小雨の時が一番だということを感じました。



鈴木氏より御溝水の解説を聞く

さて、今出川御門から出発し、まずは近衛邸庭園跡の見学となりました。私は最近、近衛家当主の近衛基熙に嫁いだ品宮（修学院離宮の造営者である後水尾院の娘）の日記を読んでおり、その日記には近衛家の日常生活が記述されています。日記に描かれた庭園での生活場面を、目の前にある現実の庭園に遊ばせて、心地よくも想像に満ちた時間を過ごしました。また、この近衛家庭園は学生時代に造園実習を行った場所であり、当時に比べて明るく美しくなった庭園に只々感動し、整備を行ってくれた方々に感謝するばかりでした。

参加者の方々は歓談しながら南に足を進め、高倉橋から九条家拾翠亭とその庭園を見渡し、次に今回の見学会で一番楽しみにしていた閑院宮庭園跡に向かいました。



閑院宮邸跡庭園にて吉村氏の解説を聞く

この閑院宮庭園も学生時代に実習を行った場所ですが、当時は藪に覆われており、池も泥水が満ちていた記憶があります。その後の整備時も何度か見学させていただいたのですが、今回はじめて京都市埋蔵文化財研究所の鈴木氏と環境事業計画研究所の吉村氏の詳しい整備過程などを聞くことができ、非常に勉強になりました。しかし、閑院宮家自体の歴史もまだまだ不明瞭であり、ますます私の中では気になる存在となりました。

各庭園を廻る途中では鈴木氏から御溝水の詳しい話をきくことができ、京都御苑という大きな空間の中で各庭園同士が水の流れの上で結ばれているということを感じました。

その後、東山方面に移動し青蓮院庭園と知恩院庭園の見学となりました。今回、閑院宮と同様に、発掘調査中である知恩院方丈庭園の見学は、私の目的の一つでした。しかし、見学会の最後を飾るこの庭園を訪れた時には見学時間終了間際ということで、鈴木氏や京都市の今江氏の説明も短縮しながらのものとなり、やや慌しい時間となりました。また、池の水が引かれているという魅力的な状態でありましたが、降り続く雨で水かさが増し、州浜などが見えにくくなっておりやや残念でした。しかし、今後の調査報告を楽しみに待つこととし、見学会を終えました。

宮廷の庭を複数廻る今回の見学会は、宮廷文化を感じ取る貴重な経験となりましたが、改めて課題が多く残されていることを実感しました。特に門跡寺院や尼門跡寺院の庭園やその歴史に関しては未だまとまった研究がなく、また個々の門跡寺院についても今後の研究が待たれるところであり、さらに発掘調査や文献調査などが進んでいくことを期待してやみません。

寄稿：町田香（京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師）

論説 兵庫県の庭園文化の地域特色

西 桂

兵庫県は、北は日本海、南は瀬戸内海に面し、さらに淡路島を擁して一つの行政単位をなしている。古代以来の行政区画でいえば、播磨・但馬・淡路の三カ国および摂津国の西部五郡と丹波国の西部二郡が組み入れられ、五つの地理的・人文的違いの国が集まってできており、まさに五つの顔をもった県ということが出来る。この兵庫県には筆者の調査によれば、約百余庭の古庭園が存在している。その兵庫県というひとつの地域に存在する庭園文化の特色を述べてみたい。

このなかで国の文化財名勝に指定されているのは、安養院庭園・田淵氏庭園・旧大岡寺庭園・旧赤穂城庭園の四庭、県文化財名勝に指定されているのは、宗鏡寺庭園・恵日寺庭園・妙勝寺庭園・長泉寺庭園・太山寺成就院庭園・応聖寺庭園の6庭、その他市町の文化財に指定されているのが20庭ある。さらに相楽園・小河氏庭園の2庭が登録文化財として告示され、あと2庭が候補に上がっているという現状である。

最近の発掘調査によって、戦国時代の山城である播磨置塩城から枯山水風な庭園が出土し、場市遺跡(養父市)では14世紀から15世紀の屋敷跡から、池泉・州浜・遣水などが見つかっているのは興味深い。多くは寺院庭園

であるが、大名庭園と思われる遺構として、旧赤穂城庭園の他に、福本藩陣屋跡庭園や明石城庭園、それに規模は小さいが、出石城本丸庭園なども貴重な遺構と思われる。また洲本城下の下屋敷と呼ばれている地域は、阿波蜂須賀氏の配下にあった洲本城代稲田氏の重臣の武家屋敷が軒を並べていたところで、明治維新の新政府になり、身分問題、経済問題をめぐって、いわゆる「稲田騒動」起こし、一族は遙か北海道の日高地方に追いやられるという断絶の運命をたどった。近年吉永小百合主演の「北の零年」で映画化された稲田氏配下の武士達の武家屋敷で、ここには益習館庭園や桑島邸庭園などの庭園群が数庭残っているのは余り知られていないと思う。

県下の古庭園に使われている石材をみると、大半は花崗岩・安山岩・砂岩系統であるが、淡路島と離島の沼島の間、西日本の骨格を造っている大断層・中央構造線が走っている。この南側に三波川変成帯という結晶片岩の広域変成岩帯が連なっていることは知られているが、沼島は外帯に位置し県下で唯一結晶片岩が産出され、神宮寺庭園・旧王寺庭園には一般に青石と呼ばれている石材が使われた力強い石組の庭園が残されている。

このように見ると兵庫県下には、多くの庭園が残されているように感じられるが、質的にも量的にも全国の平均的なものである。兵庫県でもまだ悉皆調査はされていない。これからは各都道府県では基礎資料としての悉皆調査が進められるべきだと感じている。

(兵庫大学非常勤講師)

図書紹介

『JTB キャンプブックス 文学歴史-23 皇室の邸宅』

鈴木博之監修・和田久士写真
JTB パブリッシング、2006.3

日本各地にある25箇所の皇室の御用邸・離宮及び宮家の本邸・別邸の庭園をカラー写真と説明付きで紹介している。

紹介されている庭園は、有栖川宮邸跡(現有栖川記念公園)や伏見宮跡、小松宮三島別邸(現三島市立公園楽寿園)の池庭(現ホテルニューオータニ)、華頂侯爵邸(現華頂宮邸)の洋風幾何学式庭園など多種多様である。

(1、500円+税)

『つちの中の京都3』

(財)京都市埋蔵文化財研究所編
発売：ユニプラン、2006.10

京都市内で検出された遺跡を簡易に解説した書物の第3弾。隔月に刊行されている「リーレット京都」の2001年8月号から2006年6月号までをまとめた合本である。大規模の園池を検出した齋宮の邸宅跡をはじめ、押小路殿・二条殿、平安京右京三条一坊六町、松ヶ崎廃寺の園池遺構を紹介している「発掘ニュース」のほか「遺跡を訪ねて」、「考古アラカルト」などからなるオールカラーページ全60編。地下に眠るもう一つの京都の姿を顕在化している。

(2、381円+税)

南禅寺本坊の小方丈庭園(華厳庭・けごんてい)には本歌とされる南禅寺垣があります。この竹垣の歴史的経緯ははっきりとしませんが、南禅寺山内に昔から植生している孟宗竹と萩を有効活用しようという先人の智慧からきているようです。

この垣はこれまで全長約13mでしたが、今回の創作で延長は約2倍、華厳庭を取り巻くような姿となりました。形状も厳密な寸法が決まっている訳ではなく、南禅寺の庭園を40年見守っている親方(加藤末男:文化財庭園保存技術者協議会正会員)と相談、検討しながらの作業でした。こうしたその時々状況や作る人の考えを盛り込んでいけるのも竹垣づくりのおもしろいところでしょう。

南禅寺垣は遮蔽垣ではあるものの、背景の茶室を全て隠してしまう訳でなく、茶室と竹垣の見た目の美しいバランスや、茶室と露地

庭の使い易さが工夫されています。クランク状に曲がっているのもその特徴の一つです。庭は、ゾーニングや細部手法のわずかな違いで息苦しさや閉鎖感を見る人に与えてしまうことがよくありますね。ここをうまく修めるのが庭師の腕の見せどころでしょう。昭和40年代の写真を見ますと、胴縁を立子と一緒に編み込んでいた頃もあり、とても興味深いところです。拝観される方にはほとんど見えませんが、南禅寺垣の裏側は建仁寺垣の仕様で二重の構造になっています。

実際作業してみて改めて感じたことは、いかに組み立て前の下準備が大切かということです。萩の枝を整形するには骨を折りました。大津垣風の立子は建仁寺垣の立子より若干太い目に割ったものを使用します。これは竹垣全体を見た際に萩垣の幅と大津垣の幅とのバランス



作業風景



下準備の作業風景

で丁度いいリズムなのでしょう。これも昔からの工夫の一つです。

現在、完成して一年が経ちますが、青竹の若々しい雰
囲気から色が抜け徐々に庭
と調和がとれてきたように
感じます。風雨にさらされ
る場所にあるので、これま
で約5年で取換えをして

① 榎植彌加藤造園 加藤友規 竹村茂好 新里栄太

現場から届いた声

きました。今後は新たな試みとして表面の汚れを取ったり染繩の結束をやり直したり萩の枝だけ取り換えたりと、きれいな状態で長持ち出来ないか検討中です。

南禅寺本坊にはこの「本歌 南禅寺垣」の他、小方丈庭園(六道庭・ろくどうてい)横に太い孟宗竹を用いた鉄砲垣があります。これを「大筒垣(おおづつかき)」と称しています。庫裡に入った右手の滝の間には黒文字の枝を用いた穂垣があります。滝が落ちる部分は一段低くした意匠となっています。



現在の本歌南禅寺垣(平成18年2月完成時)

竹垣づくりは庭師にとってやりがいのある仕事です。四季折々に変化する庭園美の大事な構成要素の一つとして、竹垣は見る人を楽しませます。残念なことに、人工竹垣の流行に伴い天然竹垣の創作機会が造園現場で少なくなってきました。貴重な現場仕事として、これからも「本歌 南禅寺垣」を大切に見守っていききたいものです。

集中連載

「庭園探訪」

第2回

上問屋手塚家住宅の庭園（長野県塩尻市）

上問屋手塚家住宅は、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている奈良井宿の中町に間口を構える町家だ。手塚家は、近世を通じて奈良井宿の間屋役をつとめ、明治期以降も天皇巡幸に際して行在所となるなど、奈良井という地域において重要な役割を担ってきた家系だ。また、手塚家住宅は昭和46年に「上問屋手塚家史料館」として公開され、手塚家所蔵の古文書、古記録、問屋事務関連用具、生活道具などが展示されている。この展示を見るだけでも、充分楽しめる。

そして奈良井宿はよく知られているように、旧中山道六十九次の木曾十一宿のひとつとして発達し栄えたところだが、とりわけ奈良井は今でも旧宿場の面影を色濃くとどめ、豊かな自然風景にもつまれた極上の価値を有する地域なのだ。

さて、旧中山道に沿って展開する落ち着いた宿場町景観に魅せられながら歩をすすめていくと、入口の土間が正面両脇にひとつずつあり、まるで左右対称であるかのような際だった特徴をもつ建物が見えてくる。上問屋手塚家住宅だ。切妻造に屋根を整形し、主屋正面は町家建築の典型を示しているが、2階正面を出梁造として問屋



上問屋手塚家住宅正面外観

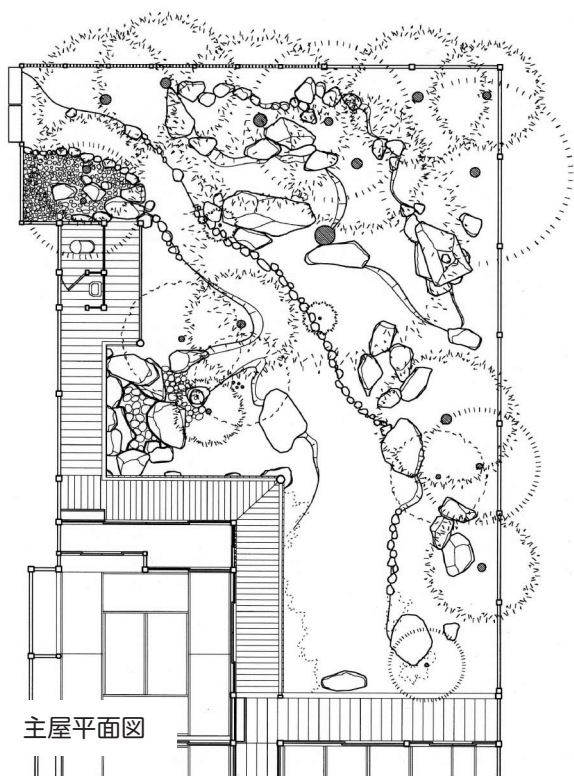
としての格式と洗練された建築美をととのえるのが、この特徴ともいえそうである。

表門をくぐり、もともと通り土間であった上り口から主屋のなかに入れてもらうと、主屋と別棟座敷という、ふたつの南北棟建物を角屋で連絡した、延々と奥にのびる建築空間が現前する。そして昼間であっても、今とは格段に暗い。日本の伝統的建築とは、このように暗いものなのか。ただし、主屋と別棟座敷をつなぐ角屋からはひとすじの光が差し込んでいる。角屋には中庭が付属しているのだ。唯一、この建築が空との関係を結ぶことができるこの中庭は、モミジとマキのみを配したなシンプルな空間にしつらえられ、木漏れ日が障子に落ちては、風によって影も揺れるという、幽玄な気配を漂わせている。

別棟座敷は、桁行きの中央に中廊下を通して建物を二分して、その中に格式の異なる座敷を並列している。手塚家の主庭は、中廊下のもっとも奥に控える「奥の十畳」と「上段の間」というふたつの座敷に付属した庭園だ。庭園の主景となっているのは、上段の間を視点場としたときに視対象となる築山とその山腹傾斜地に据えられた



中庭



枯滝組であり、平庭部を枯池と見立てた枯山水庭となっている。

庭園の景物にはこの築山と枯滝組のほか、別棟座敷と便所をつなぐ渡り廊下と一連で設置された鉢前、敷地北東隅の戸口と別棟座敷の奥の十畳をつなぐ園路、築山の東側背面に植栽された樹叢だ。庭園の東隅部に設けられた築山は、屈曲しながらL字形を呈して西側にのび、枯滝組は築山の屈曲部位の北側に据えられており、中尊石を主石としてその両側に脇侍石を添石とした、正統な三尊石組を基調としている。また、築山の西辺部分には山灯籠が設置されているが、これは長野県という地域性のあらわれと見ることができるだろう。大正期以降住宅の庭にも多用されるようになる山灯籠は、ややもすれば俗人趣味に陥りがちな庭園景をつくりだしてしまうもの

の、この手塚家住宅の場合は周囲の樹叢と好対照をなして閑寂な景色を創出している。さらに枯滝組の前面には、大ぶりの伏石が捨石のごとく配置されており、築山裾部から展開される庭面には、三石と五石の石組が存在している。別棟座敷と便所との渡り廊下に設置された鉢前は、姿のよい枝形石を縁先手水の台石に用いて、海はゴロタ石敷とする。この鉢前だけでも、充分な見ごたえのあるしつらえだ。植栽には、カヤ、ヒバ、コウヤマキなど、多くが常緑針葉樹であり、降雪量の多い長野県の地域性が表出されている。とりわけ築山裾部に配されたアカマツは、枯滝組と一連の飛泉障りの役木となっている点が注目されよう。

本庭園の当初の築造年代は、安政2年以前の庭園の拡張に端を発するものと考えられているが、天皇巡幸の明治13年、明治末期、昭和初期にも、改造の手が加えられたことがうかがわれる。ただしそれぞれの景物は時代々々の特徴を表出しつつも、みごとなバランスで庭園景が統一されている点が絶妙というほかはない。この庭はわずか30坪あまりだが、その端正な姿景からして、木曾を代表する名庭とってよいだろう。

粟野隆（奈良文化財研究所）



春の一般公開庭園 ミニ情報

諸戸氏庭園（桑名市大字桑名字鷹場 663-5）

公開日 平成19年4月15日～6月30日（月曜日休園）

開園時間 10:00～17:00（入園16時まで）

入園料 大人500円 子ども200円

問合先 桑名市物産観光案内所

TEL 0594-21-5416 FAX 0594-21-5416



※ 日程等変更になっている場合がありますので、お出かけの前に各問い合わせ先にご確認ください。

<http://www.moroto.jp/info.html> より転用

学 び の 庭

第3回 建築学

話題提供者

矢ヶ崎 善太郎 (やがさき ぜんたろう)

プロフィール

1958年 長野県松本市生まれ

経 歴

1985 京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科
建築学専攻 修了

1985 京都工芸繊維大学工芸学部建築学科 助手

1991 学校法人二本松学院
京都国際建築技術専門学校 教員

1999 京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科 助教授

2007 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授
(改組及び名称変更に伴う)

専 門 日本建築史

論 文

「藤井厚二の茶の湯と茶室」

(『建築史論聚』中村昌生先生喜寿記念刊行会編、
思文閣出版、2004年)

「待庵の床の間」考 — 『数寄屋工法集』の「利休囲
之事」について」

(野村美術館研究紀要、第15号、2006年)

編集部 (以下、編) 今回は、本学会員であり日本建築史を専門とする矢ヶ崎氏にお話をお伺いします。矢ヶ崎氏は特に近世・近代の建築と庭園に関して数多くの研究成果を上げておられます。

さて、先生は建築学を主とされつつ庭園学にも深く関与されておられますが、通常研究分野としてはどのように称されているのでしょうか。

矢ヶ崎氏 (以下、矢) 大学の事務手続きとしては日本建築史で通しています。

編 そうですか。以前、庭園史を併記されている書面を見たことがあるような気がします。

矢 確かに併記することもあります。そうすると大体珍しがられるのです。大学で建築史を勉強する学生たちの中には、庭園史に興味がある人が意外と多くいて、私の

研究室へ相談に来る学生のうち、全体の何割かは庭に興味があると言って来ます。とはいっても私自身は実際は調査対象の一つとしてあるといった程度ですが。

編 本来庭園と建物の関係は一体のものですが、それが研究の対象となると双方の関係は乖離しているように感じられることがあります。先生は建築と庭園の双方を研究の対象とされている希有な研究者でいらっしゃると思いますが、僭越ながらそのことによって気持ちの揺れや不安のようなものを感じられることはありますか。

矢 不安を感じるというほどのことはありません。そもそもは学生のころ、建築史の中村昌生先生にいろいろな調査に連れて行っていただいたのですが、先生ご自身も茶室研究のうちの重要な部分として、露地の研究もなさっておられます。そういう意味では庭園史もご専門にされているわけで、私も真似をしているに過ぎません。建築史の研究者でもその多くは庭園を研究の対象にしないとはいっていませんが、確かに取上げて取り上げていないところをみると少し距離があるといえるのかもしれませんが。

編 誤解をおそれずにいえば、明確な系統立てが確立している建築史と比べると、庭園の発達の経緯には訳が分からないという側面はありませんか。

矢 庭園が感性の所産であるといった観点からすると、確かに分かりにくい部分があります。ところで逆にお聞きしますが、庭園史において歴史の大系はどの程度確立しているのでしょうか。

編 庭園学には、長らく庭園の造形的・芸術的に優れた魅力の評価を重視してきたという側面があります。したがって、例えば建築史における書院の変遷過程の研究と同調して、庭がどのように変遷してきたかといった観点では、まだ庭の大系は整理し尽くされていないのかもしれませんが。

矢 例えば龍安寺の方丈に南面する石庭などは、既にいろんな人が高い評価をあたえていますが、それを研究対象とすれば、つくった人やつくられた背景、さらには造営後の変遷などを冷静に考察しなければならない。それはそれで一定の成果は生まれるし、興味深い。しかし、いざ石庭を目の前にすると、それは現在の庭として、結局は誰もがそれを名園として認めるということになってしまいます。眼前にある名園にもそれなりに歴史の積み重ねがあるのですが、それはそれであって、何故それが名園を称されるのかは説明できない。人それぞれですね、評価の基準は。歴史の積み重ねを実証的にあきらかにしたとしても、

その意義についてはあまり理解してもらえないので、結果的に研究対象として扱うことが敬遠されてしまいます。

編 なるほど、庭の周縁については語る事ができて、そのものについては言及しづらいということですか。

矢 庭が人々を魅了してきた部分も大事ですが、それだけではなくもう少ししっかりと庭が築かれた社会的背景や地理的条件などを視座に入れて、同時代庭園の比較研究をしていくことが求められているのかもしれません。同時代における周辺分野との交流も必要ですね。

編 学際的な活動を推進する本学会では、もっと他分野の方々との交流を深めようと考えている人も多いようです。

矢 庭は遺構が少なく、加えて変異の度合いが多いので歴史の変遷を辿るのは難しいですし、文献や絵画資料も限定されていることが、結果的としてとっつきにくく敬遠されているという節があります。

編 先ほど、奇しくも訳の分からないという表現をしてしまいましたが、あえて完璧を求めるのではなく、ある程度曖昧な状態で整理する努力なら可能と思うのですが。

矢 ははあ、なるほど。ですが、それは微妙なところですね。

編 確かに微妙なのですが、埋蔵文化財の発掘調査成果なども総合して考えていけば、庭の歴史の変遷がおぼろげながらも見えてくるのではないかと感じます。発掘調査でも建物の遺構は明確に検出されることが多いです。

矢 確かに最近発掘調査で多くの成果が出ていますが、庭そのものがはっきりと検出されることは少ないですから、建築と絡めれば明確になってくることもあるかもしれません。特に機能の面では。でも、建築も地上の姿は想像するしかない。

編 少し話が冒頭に戻りますが、以前、京都工芸繊維大学で建築デザイン分野を専攻されていた木村貴志さんが金戒光明寺の塔頭西翁院境内にある露地の空間特性について論述されていました。それを拝読して改めて感じたのですが、庭園学と建築学とは場面展開の表現に関する語彙がずいぶん違いますね。例えば木立の作り出す光と影などといった…。

矢 たしかに、建築学特有の表現方法みたいなものがあるかもしれませんね。

編 先生は、建築学と庭園学との間に言葉の壁のようなものを感じることはありましたか？

矢 そのようなことは特に感じませんが、例えば学会の場で西翁院の露地を舞台に、庭園学と建築学の人をペアにして記述の比較実験をすれば、それぞれが何を見て、何に注目し、それをどのようなことばで語ろうとしているかの相違が顕著に表れるかもしれません。

編 それは、テーマを具体的にすればするほど興味深い結果がでるかもしれませんね。

矢 そうそう、あまり対象を広げずに。

編 気の早い質問になりますが、このような実験を重ねていけば、双方の意思疎通は円滑になるでしょうか？

矢 それは分かりませんが、互いにどのような考えをしているのかについては興味深いところです。建築の分野において、庭に興味を持っている部分は、庭のシークエンス（編集部注：一続きの場面）に関する表現ではないでしょうか。それを都市のシークエンスに置き換えようとしている。例えば、都市に緑を挿入していくといったように。

編 しかし、そのようなことは歴史的に行われてきたことではないでしょうか。露地庭なんてその典型です。

矢 そうですね、それは本来建築でも知られていたことですが、現代建築の世界にはうまく伝えられていない状態にあります。

編 ところで私見ではありますが、庭園と建築においてシークエンスのとらえ方を比較すると、どちらかといえば建築は即物的で、庭園は例えば樹木の群と群との間に発生する隙間をとらえるといった違いがあるように思います。

矢 それは、同じ場所でも体験していることがそれぞれに違うことが、感覚の違いとして現れているのでしょうか。

編 ただ建築学の方も、庭園学において表現している空間の体験をしているでしょうし、ことさら庭園に興味がある方はその魅力も知っているはずですが。なのに何故、そうした体験は研究対象とされにくいのでしょうか。

矢 やはり、そういった体験の感動を研究対象としても、分析することができない。私も庭園を研究対象にしているといっただけでも、人を感動させる、まさに感性に訴えるところはやはり分からないので、少し距離を置かざるをえません。

編 実際に体験してその話ができるのですから、記述の工夫をすれば何とか表現できるのではないかとも思えます。但し、結果としてその表現は文学、詩のような物語的なものになってしまうかもしれません。

矢 研究として建築史の分野ではどうしても実証性が求められますので限界がありますが、人の内面に入り込んでいつて何を伝え、証明しようかという点では、建築論という分野に近いことかもしれませんね。

編 物語といっても、歴史の物語性と、今日の空間体験における物語性があってもよいのではないのでしょうか。

矢 そういうことを表現する、語る努力はしなければならぬことは確かだと思います。そのためには、まずし

っかりと歴史の部分を押さえていかなければならない。庭園では先ず発掘調査の成果が重要になってくるでしょう。それがよりどころになって、歴史研究がひろがっていくのだと思います。

編 先述の実験を併せて行うことで、双方の歴史観の共有が計られることに繋がりませんか。

矢 いやあ、すぐ成果が出るかは分かりませんが、これまで交流できていない状態に、双方が近づききっかけになるかもしれません。まさしく、その試みは庭園学会でしかできないでしょう。ただ、そのような交流をするとなれば、受け入れられるものですか。

編 いろんな意見があるでしょうが、庭園学会の学際的な活動方針からいえば望ましいことだと思います。

矢 そうであれば、発表の場が増えるということで建築学としてもありがたいことです。これまでは建築の方にも、庭に対する偏見が少しあるかもしれません。

編 その偏見を緩和するためにも実験等を通して交流ができればと思います。ぜひその時は、ご指導のほどよろしくお願いします。最後になりましたが、先生にとっての庭園に対する率直な印象とはどのようなものですか。

矢 先にも言いましたが、そもそも私が肩書きに庭園史を加えている理由は、学生たちが興味を持ってくれるという、不謹慎なものでした。しかし、今、振り返ると庭に携わっていたことで、建築だけをやっていただけでは予想のつかない、さまざまな出会いがありました。庭園を専門にして研究や創作をしておられる方々との出会いによって、私は計り知れないほどの大きな学恩をいただいています。あなたもそうです。また、建築だけを研究対象にしていたとしたら、おそらく出会うことはなかったであろう研究対象、たとえば山縣有朋とか伊集院兼常といった歴史上の人物に出会えた。それがまた、見方を柔軟にすれば建築史の世界においても重要な人物であったりする。数寄的な空間というものを建築史のなかに正統に位置づけるうえで、庭園との交流は不可欠であるということ。あたりまえのことですが、あらためて実感しています。さらにその出会いから人との出会いの場が広がっているという点で、今では庭を研究対象としていることに感謝をしています。

編 長時間、本当にありがとうございました。

(平成 19 年 2 月 20 日)

インタビュアー：今江秀史

■編集後記

リニューアルして3号め、「3号雑誌」という揶揄がありますが、本広報委員会はますます意気盛んです。学会ニュースの編集会議は月1度ひらかれますが、広報委員のメモには庭園関係記事の候補がぎっしりです。▼とはいえ、まだまだ十分な紙面構成にいたってはおりません。学会の行事の予定と報告を中心としつつ、活発な会員の活動や庭園関係情報を数多くお伝えしたいと考えてはいるものの、割愛した記事も多いのです▼また編集部が京都にあることから、記事内容が関西地区に偏つているとの懸念もあります。たとえば去年は北海道の名勝雪園で大正期の日本庭園の修復が進められましたし、茨城県つくば市では中世からの城館史跡小田城跡で2つの池庭の発掘調査に大きな展開があり、栃木県足利市の史跡樺崎寺跡でも州浜遺構があらたに発掘されているのです▼学会ニュースの増ページによって、ニュースフラッシュとして記事数を増やすのか、あるいは一つ一つの記事を掘り下げてゆくのか。編集会議の模索はまだまだ続きそうです▼この1年を振り返ってみて感じることは、日本庭園への興味と関心は依然として深く強く、活動は盛んであるということです。このことを共有する場として日本庭園学会は重要な存在であり、その活動の現在を伝える学会ニュースの果たすべき役割は重い、ということです。▼今後もよりよい紙面づくりを目指していきますので、みなさまからのご意見をお待ちいたしております(T.N)

■学会ニュースへの投稿は下記宛にお願いします。

記事等はフロッピーディスクまたはCDにテキストファイルで保存してお送りください。

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会 広報委員会「学会ニュース」係
FAX(075)791-9342

編集長／仲 隆裕 編集・構成／今江 秀史

協 力／栗野 隆、加藤友規、西桂、矢ヶ崎善太郎

日本庭園学会広報委員会

委員長／仲 隆裕 委員／今江 秀史・吹田直子

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342